

偉大なる人民の战士

1972.3.1

共产主義者同盟赤軍派

妙義山一帯での国家権力の包囲に対する連合赤軍の戦いは、2月19日軽井沢での銃撃戦に発展した。連合赤軍の5人の戦士は、山荘を要塞とし、1500人の武装機動隊の包囲網の中、10日間激しく戦斗を継続した。彼らは、2月28日クレーン車による山荘破壊、放水、ガス銃、ピストルの乱射を受け、抵抗の物質的基盤が全て破壊されるまで、その体力の限界まで戦い抜いたのである。

きわめて革新的事件が、反動勢力とその太鼓持ちたちによって痛罵され、俗物たちのもったいぶつた、だが甚だしく馬鹿げた解釈のために、いつもその本質をすぐ明らかにされないように、軽井沢での連合赤軍の雄々しい斗いの歴史的意義も、反革命の言辞ともつていいぶつたかけ和り顔の解説と、下劣なテーマが湧き起こすおびただしいほどの渦にうもらされている。

ブルジョアジーとその先棒をかついているマスコミとは、社会主义の運動や理説が既に広範な人民の中に正義として取らえられているので、これを真向から罵倒することが出来ない。だから彼等は、現実の革命運動を社会主义の運動や理説とは全く無縁のものだと断定することによって、又、現実の革命運動と革命家のあらさがしをし、これを誇大に宣伝することによって、せいぜい方法が悪いと逃げ口上を述べることによって、結局、社会主义の運動や理説を無効化しようとくろむるのである。このいつものやり口が、今回の事件においても駆使されている。マスコミは読者に訴える為に、人間のもつ判断力の内でも最も下劣な部分を功員した。

しかしながら、ブルジョアジーとその太鼓持ちのまきあこしたおびただしいあくたも、偉大な斗いの曙光をうち消すことは出来ない。彼らがあらさがしをすればする程、あまりに立派な人物が連合赤軍の革命家であることを逆に立証してしまうし、斗いの意義と有効性とをがえって人民に印象づけるのである。装幟が粗末であるにもかゝらず、赤軍関係の出版物は詐ぶように売れ、かつ定価を上回る値段で取引きされ、少しだけ物事の判断のつく人はピラー一枚をも歴史的文章ヒ

して保管するという有様なのだ。連合赤軍の諸行動が来たるべき革命の動向、プロレタリアートー人民の勝利を準備するものであることを疑う事は出来ない。人々は、社会主义や革命は日本においてどう遠い未来のことではなく、又、偉大なる革命的諸事件に自らが対面していることを知っている。

軽井沢での銃撃戦は、連合赤軍の頼いまざな勇敢さと献身性、何よりも革命性を示した。それは革命運動における日本の貧困ードイツ革命運動上において革命的行動が欠如しており、フランス革命運動上において革命理論が欠けていると嘆かれたが、日本における革命運動では旧来いすれも、理論も実践も、著しく頭々しく貧困相であった一を克服した第一歩だった。この国では革命運動は長い間、共産党の指導下にあった。ところがこの党は、今ではプロレタリア失権、夫政の党派に全くなりきっているのに加え、ずっと以前からその資格を保持していたのである。革命理論と実践の幾度にも亘る破産によって、この党派の歴史は飾られており、新しい理論と実践は確実に破産するだろうことを確実に予言しえることにおいて、この党派の末路は約束されている。革命運動を代表する党派が、この様な状態である時、革命運動は時に露出しようが、終じて、竟争の上がらぬ、資本主義社会を根底から突き破ることは出来ないものなのだ。

新しい左翼は、革命運動における日本の貧困を克服するよう努力してきた。67年以降の斗いは、特にその準備過程であった。にが、ほんの僅かの前進で、新左翼の大多数は半ば満足し、半ばふるえ上った。それに彼らの思い上りは、ほんの僅かの前進を、世界第一級のものであるかのように取り違え、事の本質をしばしの間くもらせてしまったのである。彼らは革命者の行動においては諸外国の革命運動に及はないかもしないが、理论の面では著しく先進的であることを前面もなしに吹聴したりするのである。革命運動の進展が、革命の生みした大規模な展開が予想されて始めて、これらの幻想はまさに幻であることが理解され始めたのである。

連合赤軍の行動は革命的左翼の幻想を、幻想として白日の下にさらけだすと共に、事態を内題解決の現実的基盤にすえ直すように努めたのである。この事は何も悲観すべきことではない。革命運動における日本の貧困を貧困として正しく把握しえるならば、その事のみでも革命運動の多大なる前進なのだ。けだし、連合赤軍兵士の発射した銃弾が反革命突撃隊=特動隊員の眉間に引いた時、人民の革命の勝利と、帝国主義者の敗北とが約束されたのである。

比類ない勇敢さによって斗われた銃撃戦は、だがしかし、連合赤軍の奇襲や战术的な優位を保持した上で存されたのではない。彼らは二重に守勢であった。つまり技術的な敵追跡と、文書通りの退却の中で彼らは内戦を余儀なくされ区のである。71年6月17日明治公園で特動隊を吹き飛ばして以来の数ヶ月間、都市ゲリラは精力的に継続された。それは都市ゲリラの中に新たなる勢力を巻き込みつつ強大したのである。この小政劣期の産物が外ならぬ連合赤軍—赤軍派中央軍と日共革命左派人民革命軍の合体である。

权力の反攻は大規模に報復になされた。一軒一軒家屋を炎焼せんとするローラー作戦、尾行、テロ、全国公開指名手配、等等々、ほんの僅かの人々に対してこれ程の动员をなした事は权力自身からてなかつたことなのだ。かくして大包围網は着々とせばめられてゆき、反攻体制は整えられたのである。遂に彼らは大鋭い嗅覚をもって妙義山系を包囲した。

山岳地帯への部隊の集結は、日本のように国家权力に多大の荷动力があり、短時間の内に部隊を結集、包围しえる体制にある敵に対してはなはだ危険な行為である。69年11月大菩薩峠での赤軍派による軍事訓練はそのために、未完に終り頭が敵に拉致されることになった。妙義山での連合赤軍もまたこの誤りをおいたのである。

しかし、革命運動はこの二年内に迅速に進歩を見せ、特に都市ゲリラの分野でそうであった通り、二度目は茶番ではなく、より勇壮に結果したのである。

兵士の軍事技術の駆使は感嘆さえ呼び起し、その大胆かつ斬新な行動は、敵を動搖させさせ立たせ、その憎しみを買ひ、人民に赤軍への革命への期待感を倍増させた。人質は事の成りゆき上の偶然によるものであれ、その解放は味方の人員、配置、装備を敵に明らかにするが故に確保され、敵の前に姿をさらさず、敏捷な行動は、小人数を多人数に見せかけ、装備の劣悪さにもかかわらず確実な攻撃は確実に敵を損傷させたのである。彼らは、10日間の行動をもってゲリラ戦がいかに有効であり、敵を悩ませるものであるかを実証した。それも退却中の防禦戦においてなのだ。ゲリラ戦が攻撃的に展開されるならば、その効果は俗物どもの頭脳の容量をはるかに越えたものになろう。

現在の政治情勢において、ゲリラ戦はもっとも理にかなっており、敵を破壊し、味方を保護拡大するものである。ゲリラ（パルチザン的战斗团）を建設し、軍事技術を学び、奇襲戦法、战术上の優位を確保して戦うこと、これが今、最も要求されせいる革命运动上の課題である。

10日直にもわたる銃撃戦にも拘わらず、全国的に呼応した斗争がはじけていることは、革命的左翼の新たなる政治情況への対応をはっきりと示した。政治的諸事件は、何も求められた期日に、定められた行動がいつもなされる訳ではない。革命斗争の発展は、全く予期しがたい時に、予想外の事件を引き興し、革命諸派の敏捷な対応を要求するのである。それがへの対応、不斷に敵に有効なる攻撃を加えることの出来る体制への転換 それはゲリラ戦への転換に外ならぬ。日本革命战争全体の躍進のために、革命的敗北主義で、力のある限り戦った人民の战士に續くこと、それが革命への道である。革命的人民のとるべき手本がここにある。

偉大なる人民の战士たち！

重合赤軍 五才 8

2022年3月1日

定価 30円